◆ 巻頭言

女性にとって学ぶことの意味
―「財団70年」と「『青鞜』100年」

米田　佐代子

今年は、日本女性学習財団設立70周年である。財団では記念の70年史を、多くの人びとに読んでもらえる『女性の学びを拓く―日本女性学習財団70年のあゆみ』（ドメス出版）として刊行することになった。その編纂に参加した一人として強く感じたことがある。それは、70年前と言えば日米開戦の年で女性も戦争遂行に動員され、財団の前身として発足した日本女子会館の活動もその流れに組み込まれていくのだが、そのような時代にも女性たちの隠れた「学び」への欲求があったこと、戦後の財団はその学びの可能性を拓く役割を担ってきたことである。

昨年夏見たテレビドラマに、戦時中、中学生（旧制）の息子を少年兵に送り出して戦死させてしまった母親が、「息子が死んだのは、わたしに学問がなかったからでしょうか？」と問う場面があって胸を衝かれた。明治生まれの私の母もまったく同じ体験をし、同じことを語ったからである。戦後母は「女が学問しないと、また戦争でだまされる」と言い、読書を欠かさなかった。かつて丸岡秀子は農村の女性たちに、「読むこと、書くこと、行うこと」を提唱したが、受験や就職のためだけでなく「自分で考え、行動できる学習」を求める女性の要求に応えることは、これからも財団の課題ではないだろうか。

2011年はまた「元始、女性は太陽であった」で知られる『青鞜』創刊から100年でもある。『青鞜』は高学歴のエリート女性集団のように思われがちだが、中心人物の平塚らいてうにしても日本女子大進学を父親に反対され、母のとりなしでやっと家政科に入学している。その彼女が女性なるがゆえに非難攻撃され、絶望しながらもなお「自分の主人は自分自身である」として女性自身の学びと自覚を呼びかけ、大正期の新婦人協会設立にあたっては貧しい女子労働者にも学ぶ場をつくろうとしたことは示唆的である。9月4日には信州の「らいてうの家」で、『青鞜』100年記念の集いをしたいと思っている。

PROFILE

米田 佐代子
（よねだ さよこ）

女性史研究者、NPO法人平塚らいてうの会会長兼らいてうの家館長。日本女性学習財団70年史編纂委員（「女性の学習の歩み 実践・研究レポート」審査委員2001年度～2003年度）。専門は日本近現代女性史で、平塚らいてうを中心に近代日本の女性思想を研究。東京都目黒区社会教育委員、やまなし女性いきいきプラン推進懇話会座長、総合女性史研究会代表等。元山梨県立女子短期大学教授。